

◎ミッション2030◎ ニュースレター VOL.6

## [新しい協働]フォーラム

第6回「英神父さまと語り合おう ミッション2030」

聖イグナチオ教会では2017年度から「ミッション2030」に取り組み、「祈りを深める」「福音を伝える」「共同体を生きる」という各柱で、順次ワークショップを行ってきました。

今年度は「新しい協働」をテーマに、司祭、修道者、信徒の区別なく連携していくことを目指して、教会活動を広く見直すためのフォーラムを全6回の予定で開催してきました。

最終回となる第6回フォーラムは2022年3月20日(日)に行われ、英神父さまからミッション2030のスタートから現在までの活動の詳細をお話いただき、その後、参加者の皆さまと分かち合いを行いました。

## 英神父さまのお話

## ミッション2030の前文に

## 込められた思い

「教会活動を見直してみよう」という議論が2014年9月の信徒評議員の研修会で行われ、2015年度に年間を通して「教会生活見直しワークショップ」を開催。信徒の皆さんとともに教会の現状を見つめ直し、これから私たちがどのように信仰生活を歩んでいくべきかを探してきました。

そうして2016年、教会の方針となる「ミッション2030」が正式に

## ◇ミッション2030 前文◇

私たち聖イグナチオ教会は、祈りにもとづく使徒的共同体を生きていきます。

現代の社会は、命の軽視や孤独、過度の競争原理や格差、環境破壊など、未来に希望を見だしにくい反福音的なものに脅かされています。それに対して、私たちは自分たちの殻に閉じこもることなく、いつくしみの扉を開いていきます。

私たちは、同伴者イエス・キリストと心を合わせて、貧しい人や弱い人の声を聴き、皆でともに手をたずさえて（日本人も外国人も、若いも若きも）、福音の喜びを分かち合っていく使命を生きていきます。

始まったのです。

「ミッション」という語には使命、任務、役割などの意味がありますが、具体的には、目標を定めて、その目標に向かって実際に歩いていくことを指します。それを言語化したのが、ミッション2030の前文です（囲み参照）。

冒頭の「祈りにもとづく使徒的共同体を生きていきます」がミッション2030でもっとも大切な部分です。祈りの内に御旨に耳を傾けながら、人々のために生きる共同体となることを目指す。これが私たちの目標です。

「現代の社会は～いつくしみの扉を開いていきます」の部分は、2016年当時の社会状況を踏まえた内容となっています。今なら疫病や戦争が入るかもしれません。いずれにしても、私たちにとっての誘惑は「殻に閉じこもる」ことです。人は危機に直面すると不安や恐れから閉じこもりがちになりますが、それとともに教会の力は弱くなってしまいます。教皇フランシスコも「勇気をもって扉を開き、外へ出て行こう」と言われているように、どのような危機に瀕しても教会は

扉を開き、すべての人を受け入れることが重要です。

次の「同伴者キリスト」は、エマオで弟子たちとともに歩み、導いたイエスのイメージです。

そして「皆で共に手をたずさえ」は、協働を表す部分です。外国人信徒との関わり方は、ミッション2030が始まった当時と現在では大きく変わり、交流は今後さらに深まっていくでしょう。2030年になって教会のミッションを書き換えるときがきたら、「イグナチオ教会はインターナショナルコミュニティを目指す」と明記すべきだと思っています。

そして神さまが与えてくださる「福音の喜び」を私たちがどのように分かち合っていくかを考え、その喜びを生きていく。これが教会、そして私たち信徒が目指す方向性の大前提です。

## | ミッションを実現する4つの柱

このミッションを実現するために、具体的にどのような信仰生活を歩めばいいかという4つの柱を設けました。

まず1つ目の柱が「祈りを深め

る」です。教会にとって、また私たち信徒にとって、祈りはすべての土台です。神からの呼びかけを一人ひとりが受け止め、信仰と生活がひとつになるように心がけ、キリストの使徒として生きるために神との生きた交わりを深め、聖イグナチオの霊操にもとづいた霊的養成を心がけていきます。

2つ目の柱が「福音を伝える」です。社会全体の福音化を目指し、教会、職場、家庭など各々が置かれている場で福音を生き、福音を伝える気持ちを大切にしながら、共同体として個人として、仕える心で使命を果たすように目指していきます。

3つ目の柱は「共同体を生きる」です。信徒一人ひとりがこの教会を「わが家」と思えるように、つながりや交わり、居場所感などを大切に、どんな人も迎え入れ、互いに支え合いながら生きていくことを目指します。

そして4つ目の柱が「新しい協働」です。お客さま気分教会に来るのではなく、各自が主体的に奉仕や活動に取り組み、協働する体制を目指していきます。この根底にあるのは司祭や修道者の不足という問題です。献堂時と今を比べると、司祭の数は半減しており、今後も増えることは望めません。ですから司祭や修道者に頼らず、信徒が主体的に教会生活、信仰生活を営んでいく必要があります。さらにイエズス会の教会としてイグ

#### ミッションを実現する4つの柱

1. 祈りを深める
2. 福音を伝える
3. 共同体を生きる
4. 新しい協働

ナチオの霊性を深め、世界のイエズス会が考える優先課題「UAPs」（イエズス会使徒職全体の方向づけ）にも取り組んでいきます。また、イエズス会の4つの教会（イグナチオ教会・山口教会・祇園教会・六甲教会）の連携を強め、東京教区の一員として他教会とのつながりを大切にしていきます。

以上の柱を、2017年から毎年ひとつずつ取り上げ、重点的に取り組んできました。新型コロナウイルスの影響で、「新しい協働」が2021年度の実施になりましたが、それも無事終わり、ミッション2030の立ち上げ・計画立案・実施に携わってきた「ミッション促進チーム」はこれで解散となります。ただしミッション2030そのものは今後も続きますので、活動を継続するスタッフを中心に新たな取り組みを行っていきます。

#### 各柱の具体的な活動目標

4つの柱にはそれぞれ、「アクションプラン(AP)」（添付資料参照）と呼ばれる活動目標を設定し、セミナーやワークショップを開催したり、新たな活動を立ち上げたりしながら具体的に取り組んできました。

初年度となる2017年度には1つ目の柱である「祈りを深める」に重点を置き、まず、個人そして活動グループで霊的な振り返りを行い、刷新を目指しました(AP1-1、1-2)。活動グループの刷新は今なお緊急の課題です。活動グループの多くが高齢化し、活動の継続が難しくなっているからです。今年度のフォーラムをグループメンバーの募集の場にする構想もありましたが、

活動休止中のグループが多く、叶いませんでした。これは今後、工夫して取り組んでください。

祈る機会を作る(AP1-3)という部分では、「祈りのとりなし隊」というグループを立ち上げ、主任司祭として祈ってほしい意向をグループの参加者に伝え、祈ってもらっています。

典礼(AP1-4)は、今年11月に式文が大きく変わるので、学び直しが必要です。共同体として祈る機会(AP1-5)はかなり増えました。聖体礼拝、十字架の道行き、ロザリオの祈りなど伝統的な信心の他、聖書通読、現代的な黙想であるラビリンスウォークなどが始まっています。また、YouTubeで霊操講座の配信もスタートしました。

2018年度には2番目の柱、「福音を伝える」に取り組みました。コロナのおかげもあって、ミサや講座の配信、ホームページ、ツイッターなどさまざまな発信(AP2-1)が行われるようになりました。共同体に迎え入れる体制(AP2-2)では「ウェルカムテーブル」がスタートし、目覚ましい活動をしています。

一方、今後も引き続き取り組んでいきたいのが、信徒による入門講座(AP2-3)とエコロジー(AP2-4)です。信徒による講座は既にいくつか行われていますが、司祭・修道者の減少に対応するためには不可欠です。エコロジーはイエズス会の「UAPs」や東京教区の「宣教司牧方針」でも取り上げられ、社会的にも重要な課題です。引き続き取り組んでいきましょう。

東京五輪に向けた歓迎体制(AP2-5)は、かなり準備が進んでいましたが、ご存じのように無観客

開催になってしまいました。しかしコロナ後に外国人観光客が戻ってくることを想定して、「ウェルカムプロジェクト」という形で活動を続けています。各聖堂の入り口にQRコードが付いているのはご存じでしょうか。あれは同プロジェクトのメンバーが作った教会案内です。QRコードを読み取ると聖堂の説明が出てくるので、試してみてください。

東京直下型地震に対する備えとして「防災小委員会」(AP2-6)を立ち上げましたが、今後は「防災対応チーム」が発足する予定になっています。困っている人を助ける活動(AP2-7)としては、おとな食堂、シェルターなどの活動がスタートしています。

2019年度は3番目の柱、「共同体を生きる」に取り組みました。洗礼を受けた人の後追い調査(AP3-1)は、受洗後、教会に根付かない人が多数いるという背景から行われました。残念ながら理由や原因を特定するには至りませんでした。これは継続的な検討課題です。また、行事やイベントを信徒同士のつながり作りの場にしようという考えからいくつかの取組みをしましたが(AP3-2)、コロナ禍に入ってほとんどの行事がオンライン化されたため、今のところあまりうまくいきません。

小共同体づくり(AP3-3)では、「シャロンのバラの会」という代父母の会ができました。当教会は挙式数が多いのですが、結婚後、教会とつながりを持たないカップルが多いので、そのあたりも今後の課題です。高齢化社会への対応(AP3-4)も、コロナ禍に入り残念な

がらほとんどできませんでした。

その一方で、非常に活発になったのが青少年活動(AP3-5)です。WYD(ワールドユースデー)には教会から正式に若者を派遣しています。派遣者たちはWYDを通して信仰を深め、意識が高くなり、帰国後は積極的に教会活動に取り組んでいます。次回のWYDは2023年にリスボンで開催されますが、以前と比べて外国人の派遣対象者が格段に増えていることは、インターナショナルな若者の活動が活性化している印です。毎年4月31日には、若者たちによるイグナチオユースデーも開催されています。

ボランティア派遣は、熊本の震災や広島の大震災の際に行われました。これも現在はコロナ禍で休止中ですが、派遣に必要な資金は確保しており、いつでも再開することができます。

弱い立場にある人への合理的配慮(AP3-6)に関しては、聴覚障がい者のために、話した言葉が文字変換される「UDトーク」という設備の導入を検討していました。性能が不十分といった理由などで導入には至っていませんが、加齢により聴力が低下している方々のためにも重要な取り組みです。テクノロジーは日進月歩なので、携帯アプリなどで対応できる時がいずれ来るかもしれません。

そして2021年度に取り組んだのが4番目の柱、「新しい協働」です。ミッション2030が始まった当初は「きょうどう」と平仮名表記でしたが、共に働くという意味を意識して、漢字表記の「協働」に変わりました。

協働委員会の設置(AP4-1)とい

う部分については、「ミッション小委員会」を立ち上げ、教会組織の見直しを始めています。昨年は同委員会が中心となって活動グループ規約の改正を行い、さまざまな活動をしている方たちに「活動グループ」としての登録と、「教会活動連絡会議(活連)」への加入を呼びかけました。そして今後は活連の再編成に取り組もうとしているところです。その目的は活動グループ間の連携を強め、協働をさらに進めていくことです。

東京教区(AP4-2)からは近々、教会活動の仕組みの見直し案が出る予定です。そのなかでは各教会に「教会委員会」を設置するようにとの提言がなされているので、今後、教会委員会の規約を作り、新たな宣教司牧評議会を立ち上げるという課題が待っています。また以前、故岡田大司教から「年1回、総会を開くように」との提言がありました。当教会では昨年ようやく、「年次報告会」という形で開催することができました。この年次報告会も、報告をただ聞くだけでなく、今フォーラムのように信徒が参加し、分かち合いを行うような形で開催したほうが意義があるかもしれません。

イエズス会の教会としてのアイデンティティやミッションを共有していく(AP4-3)という点では、イグナチオ年にちなんで霊操の講座を開催したりUAPsに取り組んだり、今般のウクライナ危機に当たってJRS(イエズス会難民サービス)と連携し、信徒の皆さんに募金に協力して頂いています。また一昨年にはクリスマス募金を集め、スリランカのエコロジーセンターに寄

付しました。コロナ禍が収束したら、そのエコロジーセンターを訪問するなどイエズス会の世界的ネットワークとつながりを作っていくことを考えたいものです。

イエズス会の4つの教会との連携は深まっており、巡礼の企画も持ち上がっています。私が六甲教会に赴任するので、皆さんが巡礼に来たら何ができるかを考え始めています。六甲教会なら高山右近がテーマになるでしょうか。

以上、ミッション2030の取組みについて総括しましたが、ミッションの根幹である前文と4つの柱は今後に変更せず、これに沿って歩んでいくと良いでしょう。それに対して、アクションプランは刻々と変化していくべきものですから、今後どのようなことに、どのような方法で取り組んでいくかは、そのつど練り直すことが必要となります。達成できていないことは見直し、工夫して、新たな形で取り組んでいくことです。

### 信徒の分かち合いから

英神父さまのお話の後、参加者の皆さまが分かち合いを行いました。

抜粋してご意見を紹介します。

「これほど多くの取り組みが行われていたことをはじめて知った。私なりに伝え続けていきたい」

「持病があるので、ミサや講座の配信に助けられている」

「ネット難民も生まれている。そういう信徒への対応は今後の課題である。ハウツー講座などがあると良い」

「教会共同体は祈りが基本だと再認識した。霊操や祈りを大切にしていきたい」

「若者の活躍はとても嬉しく、頼もしい」

「高齢者の集まる場があると良い。同世代で分かち合いをしたい」

### 英神父さまのまとめ

イグナチオ教会が目指す姿は、ネットワーク型の教会だろうと思います。規模の大きさからいって、全員が一丸となって何かをするというのは難しいので、「さまざまな形で緩やかにつながる」、そんなイメージです。コミュニティや共同体の私なりの定義は、顔や名前が互いにわかる10人程度の規模です。信徒一人ひとりがそうした小さな

共同体に何らかの形で属するのが理想ですが、深い関わりを望まない方、ネット上でつながっていればいいという方など、ニーズは様々です。メールマガジンや手紙など方法はいろいろあるので、各ニーズに応じたつながりを作っていくと良いでしょう。コロナ禍とコロナ後、状況によってもニーズは変わります。絶えず工夫し、考えていくようにしましょう。

「同世代で分かち合いをしたい」という意見が出ていましたが、やりたいことがあれば積極的に挑戦してみてください。大きな教会ですから人材は豊富で、何でもできます。ただしそれには旗振り役が欠かせません。つまり、一人ひとりが主体的に活動に取り組むことが必要です。例えばこのような形のフォーラムを定期的で開催し、そこで提案したり人材を募ったり、新たな活動を立ち上げる場にしたりするのも一案です。前向きな気持ちになって声かけをしたり、仲間づくりをしたり、いろいろと工夫してみると良いと思います。

皆で力を合わせて、今後がんばってください。

### 【ミッション2030の歩み】

- 2014年 信徒評議員研修会で教会生活を見直すことが決定
- 2015年 信徒参加による「教会生活見直しワークショップ」を開催
- 2016年 教会の方針「ミッション2030」を決定
- 2017年 1つ目の柱「祈りを深める」に取り組む
- 2018年 2つ目の柱「福音を伝える」に取り組む
- 2019年 3つ目の柱「共同体を生きる」に取り組む
- 2020年 新型コロナウイルスの拡大により教会活動が制限される
- 2021年 4つ目の柱「新しい協働」に取り組む



## ミッション2030 アクションプラン(AP)

### 〈1. 祈りを深める〉

- AP1-1：まずは一人ひとりの霊的刷新から。自分の召命を意識し、自分の使命を見いだすこと。そのために、何かしら1年間の霊的ふりかえりの計画を立案・実施。個人レベルにおいて、何らかの促進・刺激を与える。例えば、個人的なふりかえりのワークシートを作ることか。
- AP1-2：各活動グループもミッション2030からふりかえりの機会をもつ。各グループが刷新されるように。5年、10年後を意識して、場合によっては活性化のために何かを変えていくことも。例えば、活連などを通して呼びかけ。
- AP1-3：ミッション2030を実現する一歩として、実際に祈る機会を作る刺激と工夫。さまざまなキャンペーンを張る。日曜日のミサに出よう運動。朝晩の祈りをしよう運動など。
- AP1-4：典礼の見直しと工夫を重ねていく。  
例えば、葬儀の見直し、主日のミサの時間変更など
- AP1-5：共同体で祈る機会をこれからも作っていく。  
例えば、聖体礼拝、ラビリンスウォーク、十字架の道行き、ロザリオ

### 〈2. 福音を伝える〉

- AP2-1：新しく来る人を迎え入れる体制（1）。  
インターネットでの迎え入れの充実。ホームページ、フェイスブックなど。
- AP2-2：新しく来る人を迎え入れる体制（2）。  
教会案内（コンシェルジュ）を常駐して、いつでも誰でも迎え入れるように。
- AP2-3：信徒による入門講座開設の準備を始める。  
東京教区（古川氏が参加）、上智大学と連携しながら。
- AP2-4：信仰に基づく正義の促進やエコロジーについての学習会や活動の充実。
- AP2-5：2020年東京オリンピック大会の歓迎体制を検討する。
- AP2-6：防災委員会の再開。東京直下型の大震災が起きたときの、教会の対応を検討しておく。防災訓練から次の段階として。
- AP2-7：今、困っている人を助ける具体的な活動をいつでも始められるように、応援していく。

### 〈3. 共同体を生きる〉

AP3-1 : 洗礼を受けた人の後追い調査。

受洗後、教会に定期的に来ない人の原因を調査して、改善点を探していく

AP3-2 : 既存の行事を、共同体的なつながりづくりに活かしていく工夫。

例えば、教会祭で名札をつけてみる。あいさつ運動をする。さまざまな行事のフォローアップを考えてみる。

AP3-3 : 小共同体づくり。多くの人に多様な居場所を作っていく工夫。

AP3-4 : 高齢化社会への対応。高齢信徒のケアと葬儀のあり方を見直す。

現在の病者への聖体奉仕、訪問グループなど。葬儀に信徒がかかわる。

AP3-5 : 青少年の活動の活発化の工夫。

WYD へ派遣、ボランティア派遣、イグナチオユースデイを始めるなど。

AP3-6 : 弱い立場にある人に対する合理的配慮（障害者差別解消法に基づく）を心がける。

例えば、聴覚障害者のために、UDトークを導入する。

### 〈4. 新しい協働〉

AP4-1 : 協働委員会を設置。司祭減少に対して、信徒の役割の拡大をしっかりと腰を据えて

考え、計画を練る。将来的には、教会組織の見直しまで。

AP4-2 : 東京教区との連携。

さまざまな委員会への参加など。

AP4-3 : イエズス会の教会としてアイデンティティ。イエズス会のミッションを共有し

ていく。